

和8年以後は下降傾向を辿る。そしてこの傾向は第二次大戦後の農地改革へと流れ込んだ。

中野から吉祥寺までの商店街の比較研究

中野篤子

明治22年に武蔵野の原野を一直線に切り開いて、以来武蔵野の発展と共に走ってきた中央線は主都の大動脈として、ふくれ上がる沿線の人口に対応しつつ西へ西へと伸びていった。その中央線沿線の、現在比較的発展しつつある吉祥寺と中野、及びその間の4駅の駅前商店街に関していくつかの指標を設けて、発展状況を比較観察してみた。

まず比較の大型の駅、中野と吉祥寺を業種分類の上で比較してみると、これらは異なったタイプを示すことがわかる。前者は歓楽的要素が強く、後者は商業的要素が強い商店街である。中野の商店街は吉祥寺ほどアカ抜けず、デパートなども少ないが、区役所や大規模な青少年会館の存在、歓楽街が密集していること、大きな通りが駅を貫ぬいていることなどが人を集める要素となっている。これに対して吉祥寺は、デパートやターミナルビルなどの大型商業施設が集中しており、商店街も明るく近代的であり、数字の上で予想される以上に商業活動の規模は大きいものと思われる。但し、すべてが見かけ通り繁栄しているわけではなく、中心部に意外とさびれた部分がある。

西荻窪と阿佐ヶ谷は吉祥寺と同じタイプであるが、道路網の形から商店街は線的発達しか出来ない為、規模は小さい。

高円寺は荻窪と同じタイプだといえるが店舗数において他の5駅を凌いでいることが注目される。景観的には南側に高いビルが目立つが、これはマンションや貸ビル形式が多く、商業施設との関連は薄い。従って今後、経済的要素や高層住宅の方面でのびていくことが予想できる。

荻窪は、外観的には大型の共同ビルが目立つし、商店街も明るくにぎやかな印象はあるが、交通の便がよく、昔から発達していた所であるにもかかわらず、数字の上ではあまりのびていない。

西荻窪は、駅前も通りも狭く、店舗数も一番少ないが、質の面では荻窪よりも充実している。ただ古い小規模な商店が密集しているだけで、今のところ、共同ビル建設や大型施設進出の兆しはほとんど感じられない。

以上の様に6駅の差は結局交通網の発達度、駅前の形態、公共施設の有無、後背地の規模と性格などに左右される。又、行政側が、駅前の発展に力を入れるか否かによっても差が出てくる。

西陣機業地域の研究—その実態と動向—

丹羽恵子

西陣機業地域は西陣機業によって特殊化された地域である。京都市街地の西北部一帯を占め、長い期間にわたる社会・経済・文化的諸条件により、形成され方向づけられてきたいわゆる伝統産業地域

として、一般中小企業概念では解消しきれない幅と矛盾を有している。現在、地域には、西陣織の業者約1500の営業所や工場、約4000の賃機業、約1000の関連業が集積しているが、その流行性の強い多品種少量の西陣織製品の多様性をそのまま反映して、産業・地域構造はきわめて複雑である。同じ西陣内に、近代化の極度に遅れた5人以下の家族労働者からなる零細企業から高度経済成長に即応して規模拡大をしてきた100人以上の大企業まであり、高級品も大衆品も織られ、着尺・帯の固有部門だけでなくネクタイ、室内装飾織物などの新興部門も多く織られている。それ故部門別、規模別で各々立地現状、改善要求もかなり異なる。複雑さの原因としては、本地域の伝統産業地域としての特性一例えば“産業”の方向が合理性、生産性、経営主体の概念をもつのに対し、伝統の面では逆に「過去」「伝承的な要素」がつきまとうといった、常に2つの要素の背反性の中に地域が在ることや、衣料消費の側の動機あるいは文化的諸条件がからまって、単に規模が零細であるから製品の価値が低いとは限らないという資本集中・経済効率の論理のみではない別の価値意識が地域に働いていることを見逃せない。そのため、ほとんどの企業は資本蓄積がされにくい面を持ち、多額の固定資本を投下して工場を建設するよりも、製品の性質上や経営の安全の上から丹後などの農村への出機拡大という方式によって生産を拡大してきているのが現状である。又、西陣の立地基盤自体に目を向ければ、商・工・住混合の伝統的都市空間を形成している独自の地域構造を有するが、小規模企業密集地帯として立地条件そのものが悪化しており、それが出機を促す原因・地区内労働力確保困難化の原因ともなっている。すでに大企業は自力で郊外への工場移転をすすめているが、最近みられたネクタイ工業団地建設と、西陣地区特別工業地区指定は、前者は共同化による体質改善と郊外への拡大、後者は地区内環境整備第一歩として新しい方向を示している。日本の経済構造及び人々の価値観の大きな転換の中で、この様な伝統産業地域の今後の進むべき方向には注目すべきものがある。

埼玉県朝霞市における都市化と農業の変化

長谷川 聡 子

この地域においては、34・35年ごろより「東京のベッドタウン」として宅地化が進みつつある。工業化に関しては、やはりそのころより中小企業の工場数の急増がみられるが、大工場は少ない。又、この地域は古くよりニンジンなどの根菜類に適する良好な土壌をもち「東京の近郊農業地域」として知られていたが、宅地化現象が顕著となった34・35年ごろより農地転用も増大し、耕地の減少が著しくなっている。さらに、貸し家・アパート兼業を行なう農家、都市への勤めや農閑期の日雇いなどに出る農家が増大し、40年ごろまでは他地域と比べても高かった専業農家率が低下し、近郊農業の性格を変容させつつある。

朝霞の農家戸数は全市戸数のわずかに36%（昭45）にすぎず、地域の産業の中でもその地位を低下させつつある。しかし、そのような地域においても、まだ多くの土地を所有しているのは農家である。したがって、地域の変貌一都市化現象を見てゆく際にも、農地を提供してきた（しつつある）農家の役割には大きなものがあると思う。さらに、この地域は、自営兼業農家率が高く、兼業の形として貸し家・アパート・貸工場などを営む農家が多いと考えられる。したがって、“土地”に関して農